大雑書に表現される「世界」観——「須弥山図」と「地底鯰之図」を中心に——

ポロヴニコヴァ・エレーナ

はじめに

思想史では、庶民の思想の解明がいまだに大きな課題として残されている。従来の研究では、民衆思想家や文学作品や上層庶民の日記などを資料としたものがあるが[1]、近世庶民の世界観の研究はまだ十分ではなく、一般庶民の世界観を把握するためには庶民の作成した資料・庶民によってよく読まれた資料を扱う必要がある。

ここでいう「庶民」とは一般の人々であり、知識の面では「知識人」と対になるものである。筆者の考えでは、「知識人」は思想家と同様なものであり、ある程度はっきりしたシステムとしての思想・世界観を持つ者である。そして、そのシステムとしての思想はある意味で客観的である。他方、「庶民」の世界観は多くの場合、主観的なレベルを超えていないものである。「知識人」の思想は論理的で、「庶民」の思想は直感的であることが多い。

庶民作者によって庶民向けに作成された資料の一つとしては近世の百科事典である節用集を挙げることができる。近世節用集に挿入される世界図や日本図は基本的に、中世的なものから近代的なものへ変わっていった。世界図の場合は、宇宙的な広がりとしての仏教系世界観に基づいている「須弥山之図」から、地理的な広がりとしての「世界」を表現するマテオ・リッチ系の世界図（卵形の図）を経て、

（幕末になってから）両半球図への変化が見られる。その変化は二段階のものである。まずは元禄期頃（一六八八～一七〇四）をもって従来の世界観を表現する「須弥山之図」から卵形の図への転換であり、そして幕末をもって近代的な両半球図への展開である。このように、庶民の「世界」観が次第に近代的な世界観へ変わっていったように見える。[2]

他方、節用集に挿入する日本図も、中世的な行基図から近代的な日本図へ次第に変わっていった。その変化の時期は世界図の場合ほど明らかではないが、幕末の節用集には例外なく近代的な日本図（測量を考慮に入れて作られた地図）[3]が挿入されていたのである。

このように見ると、節用集に表現される世界観は次第に近代的なものへ変わっていったことがわかる。しかし、近世庶民の世界観は実際、どうであったのか。節用集以外の庶民の作成した資料にはどのようなことが書かれていたのか。

節用集と同様に、庶民作者が庶民向けに作成しており、庶民によってよく読まれたものとしては大雑書という書物を挙げることができる。大雑書とは日常生活に必要な知識――主に陰陽道に基づく知識――を与えるものである。もともとは暦注や物事の吉悪日の書であったが、時代と共にその内容は拡大していき、幕末になると大雑書は百科事典のようなものになってきた。[4]このような大雑書は近世にわたって数多く出版されており、一般庶民はよく見ていた書物の一つである。それ故に、大雑書を庶民の世界観を検討するための資料として用いることができる。

本稿は、大雑書を資料にして庶民の世界観――節用集に見られる世界観との対比で――を明らかにすることを目的とするものである。その際、「須弥山図」と「地底鯰之図」という二つの絵図を中心に論じる。この二つの絵図が節用集の世界図と日本図に当たるものであり、節用集との対比を行う際は便利だからである。

大雑書に挿入される「須弥山図」と「地底鯰之図」は従来、ほとんど研究対象とされなかった。仏教系世界観に関する研究[5]では須弥山説が論じられるが、大雑書の「須弥山図」についての簡単な記述は海野一隆の論考のみに見られる。同様に、地震鯰に関する研究では、大雑書の「地底鯰之図」について触れたものもあるが、それはごく簡単なものでしかないのである。[6]もう少し詳しい論及は橋本萬平の『大ざつしよ』の系統と特色」や海野一隆の「祈願儀式や魔除けとしての日本図」においてなされている。しかし、前者は大雑書の「地底鯰之図」とそれに類似した絵図の関係についての簡単な記述にすぎず、後者は大雑書における「地底鯰之図」の一覧・須弥山図との並列について簡略に

図1　『新撰宝暦大雑書』（貞享三年刊）の「須弥山図」

触れたものにすぎない。大雑書における「須弥山図」と「地底鯰之図」の分析とそれによる当時の人々の世界観の解明は課題として残されているのである。

そこで本稿では、まず仏教系世界観の表現である「須弥山図」の解読を行いながら、それに見られる世界観について考察する。次に、「地底鯰之図」に表現される世界観の解明を試みる。近世大雑書において並列したこの二つの絵図の解読によって、大雑書という書物全体の世界観が明らかにしていきたい。そして、大雑書と節用集に見られる世界観がどのように相違しているのか、その相違が何によるものなのか、についても考えたい。

一、大雑書における仏教系世界観
――「須弥山図」を中心に

庶民の間で流布していた大雑書には、寛文年間（一六六一～一六七三）以降に必ずと言っていいように「須弥山図」が挿入されている。

大雑書に見える須弥山図は、刊本によって多少の違いがあるものの、元禄期頃（一六八八～一七〇四）の節用集と同様なものである（図1）。それは、海洋や山々の真ん中に巨大な須弥山があり、そこに様々な天神が住んでいる。外海には四大州が浮かんでいる。須弥山の左右には太陽と月があり、その周りに巡っている、というような絵図である。これは仏教で説かれている「世界」である。これは大雑書を見ていた庶民が認識していた宇宙的な「世界」である。

まずは、外海に浮かんでいる四大州に注目が必要である。ほとんどの須弥山図にはそれぞれの大州に人物が描かれているのである。つまり、それぞれの大州に人間（あるいは人間に似たようなもの）が住んでいることは表現されている。このような四大州は卵形などの世界図に表現される地理的な広がりとしての「世界」である。

次に、須弥山自体を見ると、それは仏教系世界観どおりに天神の住処として描かれているのである。それは四層と

頂上に分かれている。下から順に見ていくと、一層には堅手夜、二層には持髪夜、三層には恒憍夜および多聞天・広目天・増長天・持国天、四層には四天王（毘樓博刃天王・毘盧勒刃天王・毘沙門天王・提頭頼吒天王）[7]がおり、須弥山の頂上には三十三天の住んでいる忉利天がある。これは仏教で説かれている目に見えない世界の一部である。

以上のように、須弥山図には四大州で表現されている地理的な「世界」と、須弥山自体で表されている目に見えない空間が総合的に描かれているのである。幕末の大雑書には、須弥山図の空白に次のような記述がある。

夫須弥山は極て大なる者也、万国此周囲に有、日月山を巡り昼夜を分ち、山の頂上に四つ峯八つの天あり、合て三十二天、帝釈天を合して三十三天とす[8]（嘉永六〈一八五三〉年刊の『国宝大雑書』）

この記述は簡単に須弥山図を説明するものである。この記述と須弥山図を合わせてみれば、そこに表現されている「世界」構成は三次元的なものである。

須弥山図に表現される世界観を解明する際、「蘇迷廬山」という表記にも注目が必要である。この表記は二三冊における「そめいろのやま」の例を除けば、近世大雑書の須弥山図のほとんどにあるものである[9]。これは須弥山の別表記であるが、また須弥山世界観の一つのキーワードでもある。能の一つである『歌占』（一五世紀成立）には、「この染め色の山とは、声を借りたる色どりなり、文字には蘇命路なり、蘇る命の路と書きたれば、まことに命期の路なれども、また蘇命路に却来して、ふたたびここに蘇生の寿命の、種となるべき歌占の言葉、頼もしう思しめされ候へ[10]」とある。それに倣って、近世大雑書に見える「蘇迷廬山」の表記を「蘇る迷いの山」として解釈できる。ここは仏教の六道が暗示されていると考えられる。六道は迷いある世界であり、迷いある者はその六道に輪廻転生するという。このように、須弥山図に描かれる世界は迷いの世界として暗示されていると考えられる。

この「蘇る迷い」とは『歌占』に見られる「蘇る命」と対照的である。一方は中世の肯定的なもの（「頼もしい思し召し」）であるが、他方は近世の否定的なニュアンスの強いものである。近世においては、「迷いの世界」「蘇る迷い」などの概念が庶民の間で特に注目されていたと考えられる。その一例としては、近世に流布していたいわゆる「浄土双六」（あるいは「十界双六」）が挙げられる。その「浄土双六」とは仏教で説かれる十界を構成とする飛び双六であり、単なる遊びだけでなく、熊野比丘尼などによる絵解きのためのものでもあった[11]。その「浄土双六」を実際に遊んでみれば六道をさまよう設定になっていることがわかる。これこ

そは「蘇る迷い」の表現である。「蘇る迷い」などの概念は近世庶民の思想の特徴だったと言って差し支えない。

大雑書における、以上の須弥山を基点とした三次元的な「世界」構成は一般庶民の間で大雑書を通して近代に至るまで保持されていたのである。[12] ただし、それは不変のものではなかったのである。幕末においては、従来の須弥山世界観と新しい知識（地球説）が融合した形で登場する。それは、例えば次のような説明から明らかである。

> 按ずるに地は円にして瓜の如し、南極と北極は疐と蔕とのごとし、北は高くして斜めなり、これによりて北極を巔となす釈尊天文をしらざるに非ず、天を極楽とし地獄とする説を立るより日月横に巡らし北に在北極上におけば日月横に巡る同じ理也、これ天堂地獄の説を立る為に好んで品をかへたり其転説うや〳〵しく広大の仏智を感べし（天保六〈一八三五〉年刊の『永暦雑書天文大成』）

このような説明からは、地球説と須弥山説が全く矛盾していないとわかる。北極を上にして考えれば太陽や月が須弥山説と同様に横に巡ることになるということである。

また、近代になってから、新たな展開が起こる。例えば、明治一五（一八八二）年刊の『永代万暦大雑書大全』（国立国会図書館蔵）を見ると、次のような記述に気付く。

> 天のみはしらの説によるに須弥三十三天は天日をさすなり、其次の山海の如きは金水二星をさすなり、四大州は地及び火星木星土星の四箇をさす也、迦楼羅州と云は地および木土につきたる衛星いはゆる月の伝へなるべし
>
> 須弥山頂方八万由旬にして方ごとに八天、中央帝釈天と都て三十三天と、あるは太陽則高天原天照国にして天神諸〳〵のましますことを然伝へたるものなるべし

明治時代の大雑書では、須弥山の三十三天が太陽＝高天原で、日本の神々の棲む場所とされる。ここには神道の世界観が絡み合うのである。また、須弥山世界全体は太陽系そのものの表現だという。須弥山自体が太陽で、その周りの山海が金星・水星で、四大州が地球（おそらく南贍部州であろう）・火星・木星・土星に当たるという。このように、近代大雑書の須弥山図には従来の仏教系世界観と近代的な知識を融合させた独特な宇宙観が表現される。

以上のように見れば、大雑書では須弥山世界に基づく世界観（宇宙観）が典型的なものであったと言える。このような広い意味での「世界」は須弥山を中心としたものであるが、時代と共に新たな展開を迎えていったのである。

二、大雑書の「地底鯰之図」に表現される世界観

多くの大雑書には、以上の「須弥山図」と並んでもう一つの興味深い絵地図が載せてある。それは「地底鯰之図」とあり、元禄期頃（一六八八～一七〇四）から明治時代に至るまで挿入されていたものである。

大雑書における「地底鯰之図」（図2）は多少違いがあるものの、基本は寛永元（一六二四）年刊の『大日本国地震之図』と同様なものである。その『大日本国地震之図』は「地底鯰之図」の原拠となったものだと考えられる。

このような絵地図[13]はいくつかの要素からなる。第一は、日本図とそれを取りまく奇妙な生物である。その日本図とは中世の行基図であり、六十六国二島からなり、本州・四国・九州を陸続きとして描かれたものである。その下には日本国を取り囲む形に奇妙な生物がいる。生物の胴体にはいくつかの島々などが描かれており、またその外側にも島々がある。

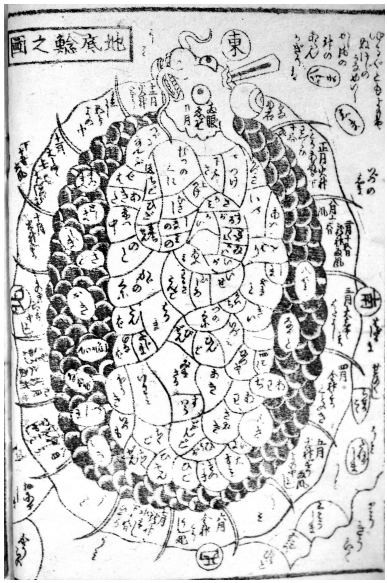

図2　『安政雑書万暦大成』（刊年不明）の「地底鯰之図」

第二は、生物の頭を刺す剣と宝珠の玉である。「かなめいし」と書かれていることからそれらは要石だとわかる。

第三は「地底鯰之図」の空白に書かれている「ゆるぐともよもやぬけしのかなめ石かしまの神のあらんかぎりは」という歌である。それは近世以降、地震除けとして用いられた地震の歌である。

以上で、「地底鯰之図」には、日本国を取りまく生物・その頭を刺す要石・地震の歌という三つの要素がある。それに加えて、鹿島という地名と生物の頭に書かれる「ゑぞ」は「地底鯰之図」に表現される世界観の解明に重要だと考えられる。

「地底鯰之図」に表現される世界観を解明するには、まず諸要素が何を暗示しているのかを検討する必要がある。

一、日本国を取りまく生物

第一に問題になるのは、日本国を取りまく生物が何なの

かということである。大雑書におけるその絵地図やこれに類似した絵地図などに注目した研究者はその生物が龍だと述べている。それは地底に龍が住むという伝説に基づいているという。[14]

確かに、大雑書における「地底鯰之図」に先行した絵地図（『大日本国地震之図』、『いせこよみ』の表紙など）には描かれた生物が何なのかはっきりされておらず、龍のような姿形をしているので、龍として捉えることができる。しかし、大雑書のこの絵地図の題目は「地底鯰之図」とあり、当時の人々にとっては日本国を取りまく生物が鯰だったに違いない。[15]それにもかかわらず、先行研究では大雑書の「地底鯰」を龍と呼ぶものもある。[16]

この「地底鯰」は大雑書に初めて姿を現したものではない。大地が魚で支えられている神話は東西を問わず、古くから知られており、日本にも「地底魚（鯰）」の話が度々見られる。[17]「地底鯰之図」はこのような神話・説話の延長線上にあるものである。また、「地底鯰之図」の原拠と考えられる『大日本国地震之図』には「此うをのな大たうれんといふ、又七はとうきよといふ、又まかさつきよ共云」という記述がある。ここには「うを（魚）」「七はとうきよ（七宝刀魚）」「まかさつきよ（摩訶薩魚・摩竭魚）」のように、日本を取りまく生物は魚だと三回も強調されているが、先行研究では以上の記述について触れてあっても、その生物の姿形（髭のある頭・鱗のある胴体など）だけが注目されている。[18]

絵地図に描かれた「地底鯰」は鯰らしくない姿形をしている。鱗のある長い胴体や髭などは龍を思い浮かべる。しかし、鯰が関東地方以東に享保年間（一七一六～一七三六）までに知られなかったようである。それは例えば、次の資料に書かれている。

鯔魚（ナマヅ）（中略）箱根より東に無之と云。[19]（貝原益軒の『大和本草』巻之十三、宝永六〈一七〇九〉年）

鯲魚、（中略）此魚素有二于関西一、而関東絶無之、既而享保十四年九月朔日、武州豬頭之池水汎濫、而江武小石川之辺塞満水、而如二大河一漲溢（シテ）、而激二流民屋数百家一（ヲ）人馬多死矣、自此而関東多有二此魚一（神田玄泉の『日東魚譜』巻一、元文六〈一七四一〉年序、早稲田大学図書館蔵本）

同様なことは、考古学調査でも明らかにされている。鯰が東日本にもたらされたのは江戸時代の中頃だという。[20]

このように、江戸に住んでいた人々は鯰がどのような姿をしているのか知らなかった。[21]「地底鯰之図」のような絵地図が最初にできた頃には、鯰がある意味で龍と同様に伝説上のものであったため、「地底鯰」は実際の鯰と異なる

形で描かれていた。

この「地底鯰」は「日本」国の境界を表現するものであり、国内と国外を区分するものだと考えられる。「日本」国はいわゆる行基図で表現されるものであるが、その六十六国二島のすべては「日本」国内と認識されていたのではない。「地底鯰」の胴体の上に書かれたものはおそらく境界的な地として捉えられていたのであろう。それらは、刊本によって多少の違いがあるものの、次のとおりである[22]（刊行年間不明の『安政雑書万暦大成』による）。

八せう（八丈島）・なかと（比定できない）・あわぢ（淡路）・とさ（土佐）・いよ（伊予）・大すみ（大隅）・さつま（薩摩）・ひご（肥後）・ひせん（肥前）・ちくぜん（筑前）・いき（壱岐）・つしま（対馬）・なめな（比定できない）・たかさご（比定できない）・おき（隠岐）・さど（佐渡）・しま（比定できない）・としま（比定できない）・まつまへ（松前）・つがるなんぶ（津軽・南部）・ゑぞ（蝦夷）

このような地域は「地底鯰」の胴体の上にあるため、もう「日本」国ではないが、その外のものでもない。つまり、「どちらの領域でもあり、どちらの領域でもない」両義的な地域であり、「内」（「日本」国）と「外」（異域・異国）を分けながら「内」と「外」を結ぶ役割を果たす領域（交流・交易の場）である[23]。

注目すべきなのは、四国や九州の大部分、東北地方の最北などは境界的な領域として描かれることである。ここには中世から近世初期にかけての境界認識[24]が窺われる。もっと広く言えば、境界的な領域が「中心」から離れれば離れるほど、異域・異界に近いものとして捉えられるのは基本的な認識と言って差し支えない。

他方、「地底鯰」の外側に描かれる島々を見ると、次のようになる（同じく『安政雑書万暦大成』による）。

八しま（八嶋）・しま（比定できない）・いづのしま（伊豆の島）・はだかしま（裸島）・せこひくし（比定できない）・らせつこく（羅刹国）・たねがしま（種子島）・りうきうこく（琉球国）・くはうしま（硫黄島の誤りか）・五とう（五島）・ひらど（平戸）・かうらい（高麗）・おにがしま（鬼ヶ島）[25]

そこには琉球や高麗などもあり、伝説上の裸島・羅刹国・鬼ヶ島などもある。「地底鯰」の外側にあるのは、全て異界であり、人間の住む領域ではないと認識されていたと考えられる。留意したいのは、「地底鯰」の外側に描かれる五島や平戸も異界として捉えていたことである。五島や平戸は異人なる外国人が多く滞在する地域だったからであろう。

以上のような境界地・異域／異国の区分けはほとんどの

行基図に共通するものであり、行基図を基本とした節用集の日本図とも同様である。それは多く中世から受け継がれたものである。しかし、行基図やほかの日本図と違って、「地底鯰之図」（及びそれに先行した絵地図）には「内」と「外」の区分け、そして境界地が「地底鯰」によって明確に記されているのである。そこにはバウンダリー（線としての国境）の萌芽[26]を見ることができるのであるが、「地底鯰之図」やそれに先行した絵地図に表現される「地底鯰」＝境界地という形式はまだバウンダリーではなく、以前のフロンティア（地帯としての国境）としての境界である。

重要なのは、近世後期以降に近代的な日本図を次第に挿入されるようになった節用集と違って、大雑書の「地底鯰之図」は近代になっても変更がほとんど見られないことである。境界地の表現に限って言えば、節用集の日本図には近世後期以降にフロンティアからバウンダリーへの変化を見ることができるが、大雑書にはそれが見られないのである。おそらく一般庶民――特に境界地に住んでいない庶民――にとっては、境界地とは線としてではなく、地帯としてのものだったろうと考えられる。それは近代になっても変わらないのである。

二、要石と鹿島

前述したように、「地底鯰」の頭を剣と宝珠の玉が刺しており、それらが「かなめいし（要石）」の表現である。図上では、この「地底鯰」の頭が「ひたち（常陸）」より東の方にあるが、鹿島（あるいは鹿島神宮）を指しているのである。それは多くの大雑書に見られる「かしま」という表記と鳥井のマークからも窺われる。

この鹿島（鹿島神宮）は事実上、常陸国にあるものであるが、「地底鯰之図」では別のものとして扱われている。というのは、この鹿島が異界への通路として位置づけられたのではないかと考えられる。

「地底鯰之図」に描かれる剣としての要石は鹿島大明神（タケミカヅチ神）を暗示しているのであろう。タケミカヅチ神が登場する神話（『古事記』『日本書紀』など）では、その神が剣を逆さまに突き立てて国譲りを迫るという。神武東征の際にも、タケミカヅチ神の剣が神武天皇を助けたのである。このように、タケミカヅチ神＝鹿島大明神は剣を持つ神・武神の性格を備えている。

また、鎌倉時代に成立された『鹿島宮社例伝記』には要石について次のような記述がある。

奥之院奥石（ニノ）御座有。是俗カナメ石（ト）云。号二山宮（ノトモ）一。大明神降給時、此石（ニ）御座侍。金輪際（ニ）連云。私、釈尊成道菩

提樹下之金剛座馬脳之石、我朝長谷之観音踏賜云馬脳之石如此。近江湖之竹生島如此侍。故竹生嶋地震不動云。常州殊地震難繁国、石御座有、為地震不動故、於当社地震不動。[27]

ここに留意したいのは要石とは鹿島大明神の御座石であり、金輪際に連なるものである。同様なことは文政六（一八二三）年初刊の『鹿島名所図絵』にも書かれている。

詞林采葉抄に。鹿嶋明神金輪際より生出たる御座石を柱として藤の根にて日本国をつなぎ給ふ云云。[28]

この御座石（＝要石）が金輪際から生出するものだということは、要石を須弥山世界と結びつけるのである。金輪際とは大地の底に接する金輪の際であり、須弥山及び四大州などはその金輪際から生えるのである。「地底鯰之図」に描かれる「日本」国も異国・異域も金輪際の上にあり、金輪際に連なるとされる要石が須弥山のようなもの（あるいは須弥山自体）となる。「地底鯰」の頭に書いてある「両眼日月」が須弥山を横に廻る日月を思い浮かべるのも、要石＝須弥山を暗示していると考えられる。

このような仏教的な解釈は剣と並んで「地底鯰」の頭を刺す宝珠の玉（如意宝珠）の描写からも窺われる。この宝珠の玉は寛永元（一六二四）年刊の『大日本国地震之図』にも筆者の確認できた『いせこよみ』にも描かれていない。これは「地底鯰之図」の作者による作風と言って差し支えない。鹿島大明神を表す剣と仏教的世界観を表す宝珠の玉を同時に要石として描いたこの絵地図の作者の目的は「日本」国が異人（＝悪のカミ・悪神）なる「地底鯰」から日本の神々と仏教の神々（両方とも善のカミ）によって守護されていると示すことにあったのではないかと考えられる。

三、「ゑぞ」

「地底鯰」と要石を結びつけた話は日本の各地に知られているが、必ずしも鹿島という地名と関連しているのではない。したがって、「地底鯰之図」における「地底鯰」と鹿島の要石の結びつきには何かの要因があるはずである。ここでは、「地底鯰」の頭に書かれる「ゑぞ」に注目が必要だと考えられる。

鹿島神宮の本殿も拝殿も奥宮も北向きになっているのはよく知られている事実である。それはこの地域が古代において蝦夷を治める前線基地だったからとされる。[29] 鹿島神宮の宝物殿に蝦夷の酋長だった阿弓流為の首が祀られているのも鹿島と蝦夷の密接な関係を語る。

小宅生順の『古今類聚常陸国誌』（享保一六〈一七三一〉年写、東北大学付属図書館蔵）には次のような記述が見られる。

高天原、倭訓太加万乃波良、在鹿島郡鹿島神詞〔祠の

誤りか―筆者の注〕東、土人相伝、鹿島明神常出此野
与外国鬼相闘、以群鹿為卒伍

つまり、俗説では鹿島大明神が外国の鬼と戦っているということである。ここでいう「外国ノ鬼」とは阿弓流為を、広く言えば蝦夷を指すのであろう。

「地底鯰」の頭に「ゑぞ」が書かれることからは、その生物が異人（＝カミ）なる鯰として認識されていただけではなく、異人（＝異国人）なる蝦夷とも重複して思われたのではないかと考えられる。すると、剣や宝珠の玉の形をし、日本と仏教の神々を暗示している要石は異界の「地底鯰」を治めているだけではなく、異国の蝦夷をも治めている表象となる。

おわりに

以上、大雑書における庶民の「世界」観について考察した。その結果は次のとおりである。

まず、近世庶民の間では大雑書を通して、須弥山図で表現される仏教系世界観が長く保持されていたことが明確である。近世にわたって、ほとんどの大雑書には須弥山図が挿入されていた。このような世界観は古代・中世から受け継がれており、また近代にもつながっている。言い換えれば、仏教系世界観は庶民の間で、基本的な「世界」観であった。

しかし、このような仏教系世界観は不変なものではなかった。幕末に近づいてくると、新たな知識（地球説など）は庶民の間でも次第に流布していき、従来の世界観を転換させていったのである。幕末の「世界」観は須弥山を中心としたものであったにもかかわらず、大地が丸いという認識は次第に広がってきたのである。大雑書の記述からは明らかではないが、その新しい「世界」観は、須弥山論争の際で須弥山世界と地球説を融合した論説に現れたものとさほど変わらないと考えられる。それらの論説[30]では、須弥山が地球の北極にあり、四大州は地球の四面にあたるという。このようなことは前述した天保六（一八三五）年刊の『永暦雑書天文大成』の須弥山図の説明と同様である。おそらくそれは幕末の庶民の一般的な認識になっていったのであろう。

以上の須弥山図は節用集の世界図に当たるとすれば、大雑書における「地底鯰之図」は節用集の日本図に当たるのである。

先行研究に龍とされていたこの絵地図に描かれる「日本」国を取りまく生物は鯰（「地底鯰」）に違いない。龍とも捉えられるような描き方は本物の鯰が江戸時代半ば頃ま

でに関東地方以東に知られなかったことから来ているが、大地の下に鯰が住んでおり、そのせいで地震が起こるという考え方は古代神話に見られる世界魚に由来していると考えられる。中世以降に仏教や陰陽道の影響で龍による地震説も流布してきたにもかかわらず、一般庶民の間では世界魚による地震説が完全になくなったわけではない。それは形を変えて近世初期まで生き続けており、再び表面に出たと言って差し支えない。

この「地底鯰」は異界のもの・広い意味でのカミとして捉えることができる。地底にいながら、「日本」国を取りまいている「地底鯰」は守護者としての役割を果たしている。それはまず、「日本」国と異国を分離することに現れる。「内」なる日本国と「外」なる異国は図上に「地底鯰」の胴体によって明確に切り離されている。

また、「地底鯰」の頭部を刺す剣と宝珠の玉で表現される要石とそれに暗示されるカミも守護者である。この場合は、治められる役は「地底鯰」にこそある。そこで、「地底鯰」は二通りに捉えることができる。一方では地震を呼び起こす「地底鯰」そのものであり、他方では異人（＝異国人）なる蝦夷である。[31] いずれも破壊者としての性格を備えているものである。

このように、「地底鯰之図」においては、神国日本――カミのいる「日本」国――の認識が読みとれるのである。守護者・破壊者の両方としてのカミがこの国にいること、カミによってこの国が守られており、またカミによって災害が起こることなどは「地底鯰之図」に表現されるのである。

以上のような世界観を表現する「須弥山図」と「地底鯰之図」はほとんどの大雑書において並列して挿入されている。このように見ると、大雑書は宇宙的な「世界」なる須弥山図を紹介した上で、小宇宙なる「日本」国図（「地底鯰之図」）をとりあげるという構成をなしている。「世界」も、（暗示された形ではあるが）「日本」国も須弥山世界観と結び付けて説明されているのである。大雑書という書物は曼荼羅のようなものとして捉えることができる。天神の住む世界や神々の住む世界は須弥山図と「地底鯰之図」に表現されるものである。この二つのカミの世界が孤立したものではなく、絡み合ったものとして登場する。ある意味で中世的なこのような世界観は近世においても展開しながら保持されていたものであり、近代にも転換されて受け継がれたものである。

それは節用集に見られる世界観と明確に異なるのである。その違いが何によるものなのかを理解するためには更なる検討が必要ではあるが、一言で言えば、それは節用集と大雑書という書物の性格が根本的に違うからだと考えられる。

節用集はそもそも国語辞典であり、近世に百科的な付録が挿入されるようになっても、基本は国語辞典であった。言い換えれば、節用集とは語彙を表示するための書物であり、その付録も様々な知識を紹介すると同時に言葉を増やす役割を果たしていたと言える。世界図の場合で例言すれば、地理的な「世界」を表現するとともに、言語としての様々な国名を紹介するというようなことである。

他方、大雑書は占いの書物である。このような性格を持つ書物には、「須弥山図」や「地底鯰之図」のようなカミの世界を暗示している絵地図が適切である。この二つの絵地図に表現される「世界」は地理的な広がりとしての「世界」を超えるものであり、仏教色の強いものである。

一般庶民が節用集と大雑書を同時に持って使用していたことによって、二つの世界観を持つことになったのである。一方は節用集に見られるような中世的なものから近代的なものへと次第に変わっていった世界観であり、他方は大雑書に表現されるような中世的なものを基本としながら時代と共にその解釈が変わっていった世界観である。これら二つの世界観が矛盾かのように見えるが、決してそのようではない。いずれの書物も庶民作者によって庶民向けに作成されたため、庶民の世界観を表すものであるが、その焦点が違うだけと言って差し支えない。節用集には主に「この世」と言える地理的な「世界」が焦点となっているが、大雑書には宇宙的な広がりとしての「世界」が中心になっている。庶民のよく見ていた様々な書物等を検討すれば、庶民の思想全体が把握できると考えられる。本稿は庶民思想の一側面を明らかにする試みである。

注

(1) 例えば、石田一良『町人文化』(至文堂、一九六八年)、庄司吉之助『近世民衆思想の研究』(校倉書房、一九七九年)、高尾一彦『近世の庶民文化』(岩波書店、二〇〇六年)、布川清司『近世町人思想史研究—江戸・大坂・京都町人の場合—』(吉川弘文館、一九八三年)、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(青木書店、一九七四年)、若尾政希『「太平記読み」の時代—近世政治思想史の構想—』(平凡社、一九九九年)、同著「近世人の思想形成と書物—近世の政治常識と諸主体の形成—」(『一橋大学研究年報社会学研究』第四二号、二〇〇四年)、荒野泰典「近世の対外観」(『岩波講座日本通史』第一三巻、一九九四年)などがある。

(2) 詳細は、拙稿「近世庶民の「世界」像—節用集の世界図を中心に—」(『日本思想史研究』第四五号、二〇一三年)を参照。

(3) 例えば、文政九(一八二六)年刊の『倭節用集悉改大

全』（東北大学附属図書館蔵）の日本図を見ると、「今新ニ図スル所測量家ノ善本ヲ縮写ストイヘトモ紙面狭小ニシテ全備スルコトアタハズ、故ニ奥羽ノ辺九州ノ地等折曲シ強テ紙上ニ塡ム、ヨツテ別ニ羅経図ヲ置テ其地ノ方位ヲシルス」という記述に気付く。

（4）大雑書に関しては、橋本萬平・小池淳一編『寛永九年版 大ざつしよ』（岩田書院、一九九六年）、横山俊夫「大雑書考―多神世界の媒介―」（『人文学報』京都大学人文科学研究所、第八六号、二〇〇二年）などを参照。

（5）海野一隆「日本において須弥山説はいかに消滅したか」（『アジアの宇宙観』講談社、一九八九年）、荒川紘『日本人の宇宙観―飛鳥から現代まで―』（紀伊國屋書店、二〇〇一年）、海野一隆『日本人の大地像―西洋地球説の受容をめぐって―』（大修館書店、二〇〇六年）、吉田忠「近世における仏教と西洋自然観との出会い」（『仏教と日本人』第一一巻「近代化と伝統」、春秋社、一九八六年）、西村玲『近世仏教思想の独創―僧侶普寂の思想と実践―』（トランスビュー、二〇〇八年）、同著「須弥山と地球説」（『岩波講座日本の思想』第四巻「自然と人為―「自然」観の変容―」、岩波書店、二〇一三年）などである。

（6）秋岡武次郎『日本地図史』（河出書房、一九五五年）、野間三郎「寛永元年刊「大日本地震之図」なるものについて」（『人文地理』第一七巻四号、一九六五年）、岡田芳朗「地震なまず考」（『歴史と人物』第九号、一九七九年）、気谷誠『鯰絵新考―災害のコスモロジー―』（筑波書林、一九八四年）、C・アウエハント『鯰絵―民俗的想像力の世界―』（せりか書房、一九八九年）、Unno Kazutaka, "Maps of Japan Used in Prayer Rites or as Charms"（*Imago Mundi*, vol. 46, 1994）、橋本萬平「『大ざつしよ』の系統と特色」（『寛永九年版 大ざつしよ』岩田書院、一九九六年）、黒田日出男『龍の棲む日本』（岩波書店、二〇〇三年）、鶴貝好子「前近代における日本人の国土観と災害観に関する基礎的研究―「大日本国地震之図」の考察を中心に―」（『史艸』第四六号、二〇〇五年）などがある。

（7）前述の増長天・持国天・広目天・多聞天と、提頭頼吒天王・毘盧勒刃天王・毘樓博刃天王・毘沙門天王は同様なものであるが、大雑書（節用集のも）の須弥山図には別々のものとして扱われている。一般庶民にとってはそれらが異なるものと認識されたからであろう。

（8）本稿ではことわりのない限り、読点・下線部は筆者によるものであり、振り仮名は原文の通りである。

（9）近代の大雑書においては、ほとんどは「そめいろの山」と表記される。

（10）『謡曲集 上』（日本古典文学大系第四〇巻、岩波書店、一九六四年）による。読点はそれによるものである。

（11）小栗栖健治「熊野系「浄土双六」論序説」『絵解き研

究』第二〇・二一号、二〇〇七年。

(12) 大雑書は近代になっても刊行し続けた。近代の大雑書においては、管見の限りでは、昭和一四（一九三九）年までに須弥山図が挿入され続けた。庶民の間では、須弥山図で表現されている宇宙的な「世界」観は長く保持されていたことがわかる。

(13) 寛永元年刊のものと大雑書のもののほかに、同様な絵地図は寛文一三（一六七三）年～貞享二（一六八五）年間に江戸で刊行されていたいわゆる『いせこよみ』（あるいは『鯰絵暦』）や、安政二（一八五五）年刊の『ぢしんの辨』というかわら版にも見られる。また、嘉元二（一三〇八）年頃に成立した金沢文庫蔵の『日本図』もおそらく同様であろう。

(14) 注(6)を参照。

(15) 天保六（一八三五）年刊の『永暦雑書天文大成』における「俗説地底鯰之図」には「地震鯰の俗説小児の戯言に似たれど文殊経の龍伏の説を拠として儲しものなるべし」とあるが、大雑書ではこのような記述が一点しかないので、鯰説のほうが庶民の間では一般的であったと考えられる。

以上の記述はおそらく『簠簋内伝』（室町時代の成立か）の第四巻における「就二柱立一龍伏口伝」を意識して書かれたと考えられる。そこには、季節ごとに龍伏の位置が記されており、「右如是案者、大聖曰、此大地底有二一大蛇一、広量難知者也。爾依二四季一、厥伏臥大異也」（『神道大系 論説編十六 陰陽道』神道大系編纂会、一九八七年、七七頁）と続く。ここでは地震と何の関係もないが、「大聖」――中村璋八がそれを大聖文殊と校訂している（「簠簋内伝本文とその校訂」『日本陰陽道書の研究』汲古書院、二〇〇〇年）――の説による大地の底にある大蛇（龍伏）は大雑書における「地底鯰」と関連できるのではないかと考えられる。それは今後の課題である。

(16) 例えば、秋岡武次郎の前掲書や野間三郎の前掲書である。

(17) 例えば、養老四（七二〇）年の『日本書紀』には国土が魚のように海上に漂っていたという。また、承平元（九三一）年の『竹生島縁起』（護国寺本）には竹生島を取り巻く鯰と蛇の戦いが語られており、似たような話――竹生島を取り巻く鯉と鰐の戦い――は十二世紀前半成立の『今昔物語集』（第三一巻第三六話）にも見られる。同じ『今昔物語集』（第二〇巻第三四話）や十三世紀前半成立の『宇治拾遺物語』（第一三巻第八話）には大風を呼び起こす寺の下にいる鯰についての記述がある（ここでの大風が地震を含む災害として捉えられる）。興味深いのは、応永二二（一四一五）年の『竹生島縁起』（群書類従本）における記述である。それによると、竹生島を取り巻く龍が鯰に

なって蛇と戦っているとのことであるが、その龍の鯰への変化は古代の「地底魚（鯰）」から中世伝説等に多く見られる「地底龍」への転換として捉えることができると考えられる。

また、文禄元（一五九二）年の豊臣秀吉の書簡を皮切りに、近世に広く流布してきた「地震鯰」が登場する。

(18) 一例としては、黒田日出男の前掲書を挙げることができる。その一七四～一七五頁には、本文で引用した『大日本国地震之図』の「うを（魚）」に関する記述が紹介され、それに続いて「この龍の名は「大唐錬（だいとうれん）」とも、「宝刀魚（ほうとうきよ）」とも、「摩訶薩魚（まかさつきよ）」ともいうとされている」（傍点は筆者による）と書かれている。

(19) 『益軒全集』巻之六、益軒全集刊行部、一九一一年。

(20) 宮本真二・渡邊奈保子・牧野厚史・前畑政善「日本列島の動物遺存体記録にみる縄文時代以降のナマズの分布変遷」『動物考古学』第一六号、二〇〇一年。

(21) 応永（一三九四～一四二八）年間に室町幕府の第四代将軍である足利義持の命に如拙によって描かれた「瓢鮎図」があるが、一般庶民はそれを見る機会がなかったのであろう。

(22) 天保六（一八三五）年刊の『永暦雑書天文大成』における「俗説地底鯰之図（ぞくせつちていなまのず）」は前述した地震鯰が龍伏の説に由来する点でも、描かれた図（「日本」国・異国の表象）でも特殊である。それは近世大雑書の「地底鯰之図」とも近代のものとも異なっており、それをどのように位置づければいいかは今後の課題とする。それ故に、本稿では「俗説地底鯰之図」について省略する。

(23) 先行研究の境界論では、境界とは曖昧な性格を備えている領域であり、内と外を兼ね備える両義的な場だとされている。村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」（『思想』第七三二号、一九八五年）、菊地勇夫「境界と民族（エトノス）」（『アジアのなかの日本史Ⅳ 地域と民族（エトノス）』東京大学出版会、一九九四年）、ブルース・バートン「境界からの日本史―想像の境界、現実の境界―」（『現代思想』第二四巻九号、一九九六年）、同著「「境界」とは何か」（『境界の日本史』山川出版社、一九九七年）、ロナルド・トビ「近世期の「日本図」と「日本」の境界」（『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年）などを参照。本文中の引用は、ブルース・バートンの諸論文からのものである。

(24) 詳細は、大石直正「外が浜・夷島考」（『関晃先生還暦記念 日本古代史研究』吉川弘文館、一九八〇年）、村井章介の前掲書、浪川健治「善知鳥考―中世の境界認識と近世社会―」（『日本歴史』第四八五号、一九八八年）、青山宏夫『前近代地図の空間と知』（校倉書房、二〇〇七年）などを参照。

(25) 近代の「地底鯰之図」には、「かうらい」が「てうせ

ん（朝鮮）」になったり、「たねがしま」が「きかいか国（鬼界島か喜界島か）」になったりするが、基本的には近世のものと同様である。

(26) 新田一郎『中世に国家はあったか』山川出版社、二〇〇四年。

(27) 「鹿島宮社例伝記」『神道大系 神社編二十二香取・鹿嶋』神道大系編纂会、一九八四年、二九〇頁。句読点はそれに従う。

(28) 『鹿島名所図絵』天保四（一八三三）年刊、東北大学付属図書館蔵。この記述は十四世紀半ば頃に成立された『詞林采葉抄』からの引用である。句点は原文のままである。

(29) 「本宮（拝殿）」『常陸国一之宮 鹿島神宮』（鹿島神宮の公式サイト http://www.kashimajingu.jp/wp/keidai/keidai03）、二〇一三年十一月一五日閲覧。

(30) 例えば、森尚謙の『護法資治論』、宗覚の地球儀で表現されるものなどである。須弥山論争についての詳細は、注(5)に挙げた吉田忠、海野一隆、西村玲の論考などを参照。

(31) 「地底鯰」＝蝦夷の捉え方は近世にたびたび使われた「鯰」の字にも暗示されるのではないかと考えられる。鯰とは文字通りに魚の夷であり、蝦夷と連想されるのである。

参考資料

①「須弥山図」『大雑書』寛文一三（一六七三）年刊、東北大学附属図書館蔵

②「須弥山図」『新撰宝暦大雑書』貞享三（一六八六）年刊

③「須弥山図」「地底鯰之図」『大ざつしよ』元禄六（一六九三）年、国立国会図書館蔵

④「須弥山図」『新板改正増補大ざつしよ』宝永一（一七〇四）年刊、国立国会図書館蔵

⑤「須弥山之図」「地底鯰之図」『大雑書』享保十二（一七三五）年刊、東北大学附属図書館蔵

⑥「須弥山図」「地底鯰之図」『大ざつしよ』宝暦三（一七五三）年刊、国立国会図書館蔵

⑦「須弥山之図」「地底鯰之図」『大雑書』明和四（一七六七）年刊、国立国会図書館蔵

⑧「須弥山図」「地底鯰之図」『永暦大雑天文大成』安永二（一七七三）年刊、国立国会図書館蔵

⑨「須弥山図」『大雑書』安永三（一七七四）年刊、国立国会図書館蔵

⑩「須弥山図」「地底鯰之図」『大ざつしよ』安永九（一七八〇）年刊、東京学芸大学附属図書館蔵

⑪「須弥山図」『増補宝暦大雑書』天明一（一七八一）年刊、国立国会図書館蔵

⑫「須弥山図」『明暦雑書天文臺』天明六（一七八六）年刊、東北大学附属図書館蔵

⑬「須弥山図」『明暦雑書天文台』寛政四（一七九二）年刊、

国立国会図書館蔵

⑭「須弥山之図」『寛政大雑書寿命袋』寛政十一（一七九九）年刊、東北大学附属図書館蔵

⑮「須弥山之図」「地底鯰之図」『大雑書』文化八（一八一一）年刊、国立国会図書館蔵

⑯「須弥山図」「地そこなまずの図形」『万宝大雑書』文化一三（一八一六）年刊、東京学芸大学附属図書館蔵

⑰「須弥山図」『文政大雑書』文政三（一八二〇）年刊、国立国会図書館蔵

⑱「須弥山図」「地底鯰之図」『大ざつしよ』文政一一（一八二八）年刊、東京学芸大学附属図書館蔵

⑲「須弥山図」『増補宝暦大雑書』文政一二（一八二九）年刊、国立国会図書館蔵

⑳「須弥山図」『大雑書』天保四（一八三三）年刊、国立国会図書館蔵

㉑「仏説須弥山之図説」「俗説地底鯰之図」『永暦雑書天文大成』天保六（一八三五）年刊、東北大学附属図書館蔵

㉒「須弥山之図」「地底鯰の図」『大雑書』弘化三（一八四六）年刊、国立国会図書館蔵

㉓「須弥山図」「地底鯰之図形」『弘化大雑書』嘉永二（一八四九）年以降、国立国会図書館蔵

㉔「須弥山図」「地底鯰之図形」『弘化大雑書』嘉永四（一八五一）年以降、国立国会図書館蔵

㉕「須弥山之図」『国宝大雑書』嘉永六（一八五三）年刊、東北大学附属図書館蔵

㉖「須弥山の図」『宝暦大雑書万々載』安政二（一八五五）年刊、大空社蔵（『江戸時代女性文庫』第九巻〈大空社、一九九四年〉における復刻版）

㉗「須弥山之図」『永代大雑書万暦大成』安政三（一八五六）年刊、東北大学附属図書館蔵

㉘「須弥山図」『万宝大雑書三世相』安政（一八五九）年刊、国立国会図書館蔵

㉙「須弥山図」『大さつしよ』江戸後期刊、国立国会図書館蔵

㉚「須弥山図」「地底鯰之図」『安政雑書万暦大成』刊行年不明

㉛「須弥山図」『万暦大雑書』刊行年不明、国立国会図書館蔵

㉜「須弥山図」『新撰宝暦大雑書』刊行年不明、東北大学附属図書館蔵

㉝「須弥山図」「地底鯰之図」『増補大雑書』刊行年不明、東京学芸大学附属図書館蔵

㉞「須弥山図」「地底鯰之図」『大雑書三世相』刊行年不明、東北大学附属図書館蔵

㉟「地底鯰之図」『寿福雑書万宝蔵』（江戸後期刊、国立国会図書館蔵

（東北大学大学院）